EU 加盟国内の高等教育機関と提携する EU 加盟国外の大学との間の学生の双方向の交流促進を目的とする国際交流助成制度である Erasmus+ program において、オランダのライデン大学とのパートナーに長崎大学が登録され、その最初の交換留学生として 2018 年 9 月～11 月までの 3 か月間、ライデン大学（Leiden University Medical Center）へ留学しました。LUMC へはこれまで当科より下山孝一郎先生や大坪竜太先生が研究留学をされており、当科と非常に縁の深い大学であり、私の場合は短期の交換留学でしたが非常に貴重な経験となりましたのでその足跡について記したいと思います。

まず、2018 年の 1-2 月頃には留学することを決心し、必要書類や TOEFL 受験などをこなして 5 月頃にようやく正式に留学することとなりました。渡航準備に際してぬかりないようにやってきたつもりですが、3 か月という短期の留学であり、一番難航したのは住居の問題でした。Leiden は慢性的な住居不足であり、なかなか住むところが見つからないことも多く、多くの学生は大学が仲介してもらい、それでも大学周辺に住めずにデンハーグという隣の都市に部屋を借りざるを得ない学生も多くいます。正式に留学が決まった頃には大学近くの部屋は埋まっていることも多く、今回は人生経験と思って自分で手配をしてみようと留学前からオランダの不動産会社のサイトで部屋を探してこの部屋が見たいとアプローチしました。しかし、Leiden に実際にいないのがダメなのか、また連絡すると言われてから全然連絡がなく、進展がありませんでした。こうなったら実際にオランダに渡って内見してすぐに契約しようと appointment をとって渡蘭しましたが、結局住居に入れるまでに 2 週間程度かかってしまい、長いホテル＋Airbnb 暮らしを要しました。最終的には快適な apartment に入居できましたが、最初から仲介してもらっていた方がよかったと後悔しました。オランダの生活ですが、Leiden は学生の街であり、治安もよく、非常に落ち着いた暮らしやすい街でした。Amsterdam や Den Haag、Rotterdam などの有名都市までも比較的アクセスがよく、効率よく観光もできました。また、長崎熱帯医学研究所に所属している Ben というタンザニア人の留学生も今回の長崎大学からの交換留学生として一緒に留学しており、お互いの授業の情報交換や観光、Ben のホームステイ先のホームパーティーなどで交流することができました。一人でも同じ状況の仲間がいることで非常に大きな安心感がありました。さらに、LUMC には循環器内科と皮膚科にそれぞれ東北大学と岡山大学から臨床留学されている先生がおられ、一緒に飲みに行ったりしました。

本題の留学内容ですが、今回の短期留学では Half Minor という授業を選ぶことになっており、これは 13 のテーマの中から 1 つを選択し、10 週間程度で集中的に学ぶコースでした。私は呼吸器外科医であり大学院生として肺の再生及び肺癌モデルに関する研究をしていることもあったため、Immunotherapy of cancer という癌の治療に breakthrough を起こした癌の免疫療法の授業を選択しました。授業は 20 人程度の比較的少人数のクラスで、私以外すべて現地のオランダ人であり、私がいることで周囲の人が全て英語を使わなければならない状況となり、少し申し訳ないような気持ちになりました。しかし、学生、教官も含めてオランダ人は非常に流暢に英語を話し操ることができるため、胸を借りて英語の授

業にぶつかってきました。日本の多くは講義がメインですが、LUMC での授業は学生の主体性を重要視しており、多くの授業が work group という形態で学生と講師が interactive に意見交換をしながら知識や理解を深めていくスタイルとなっていました。序盤に Paper test もありましたが、少人数のグループでの presentation や debate を行うことも多くありました。LUMC の学生は非常に優秀で、presentation や debate 能力がとても高く、なおかつ疑問に思ったことは些細なことでも遮って質問し、非常に向上心が高い印象があり、私も大いに刺激を受けました。最終課題は 3 人 1 グループでこれまで考えられていない免疫療法の clinical protocol を作成するというものでしたが、最後の presentation が終わったときには大きな達成感がありました。癌の免疫療法とは一口に言っても、肺癌や悪性黒色腫のような固形癌から白血病をはじめとした悪性血液疾患など多岐にわたっており、昨年のノーベル医学生理学賞に関連した免疫チェックポイント阻害薬から日本にも導入され始めた CAR-T 療法など幅広く、今後も多くの可能性を秘めた領域であり多くの患者を救うことが期待されます。

今回の留学では自身の癌の免疫療法の知識を深めることはもちろん、日本とオランダとの教育の相違点や英語力の重要性を実感することができ、非常に大きな収穫を得ることができました。現在大学院で行っている研究には直接関わる内容は多くはありませんでしたが、今後の医師人生において非常に有益な経験ができたと思っています。この留学経験を糧に、今後の研究や臨床に邁進していきたいと思います。

最後になりましたが、今回の留学に際してご尽力いただきました永安武教授や松本桂太郎医局長ならびに腫瘍外科の先生方、留学中の研究業務を引き継いでいただいた大学院生の皆様にはこの場を借りて心より感謝申し上げます。